

五月・よりそって

清水 光子

「大そうじ、四月の連休にしたいの、手伝ってね」と、或年の四月の半ばに私の子どもらに言ったら「手伝うよ、だけど風薫る五月にしようよ」という答えがかえって来た。そうして、事實はそうしたのだけど、どうして彼等はそうしなかったのか、友だちとの約束らしいこともまだしていなかったのに、と、数十年たってまで、この時期になるといつも思い出していぶかしむ。

「やっと慣れたのに、連休で、もとへ戻ってしまっ！ 又やり直してみたい！」と嘆く先生。

「『いってまいります!』の朝の声も、「ただ今」の様子も四月の頃より落ちついたようだ。新しい環境になれたせいね、きっと。」と安心している親。でも、本当にそうだろうか?

「なんとというすばらしい生育の力であろう。田に畑に、野に庭に、(山に林に森に、海に、と加えてみる私)むくむくと萌え出る若芽の、伸びて伸びて伸びてゆく勢いは、日に目を驚かすのである。しかもそれに劣らないのは子どもらの活力の伸長である。毎日その中に俱に居ながらも、日々に新しい目を見はらさせられることばかりである。」と倉橋惣三先生は『育ての心』で詩^たっておられる。五月の子ども等^らって、そうである筈。昔も今も、いつでも、と思うのは私の老化した独断と偏見でしょうか。

連休あけに時として見られる一種の退行はなぜであろう。自然にはそんな現象がないとしたら(若しかしたらあるかも知れないのに、私が知らないだけかも)それは人間だけで、その社会生活、人間関係が複雑になった今、世紀末独特な何かに原因があるのかも知れない。「折角、やっと慣れたのに! みんなと一しょにお話もきけるし、ひとりでトイレに行けるし、リズム遊びもやるようになって、何よりもお家へ帰りたいと泣かなくなったのに……」などなどと、大人の目の高さからの子どもばかりをみて、慣れることに専念していた保育者、もう一度、原点に戻って、子どもの身になって、この輝かしい五月の天地にふさわしい子どもとの生活を考えてみたいと思ったりする。

常日頃、夢中になって子ども達と生活している親だからこそ、先生だからこそ、我子、

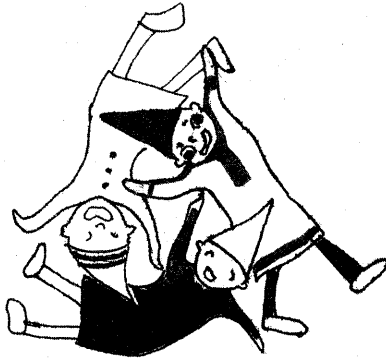
我組の子にばかり、思いが集中し、つい大きな手で相手の立場に立ってものを考えられなくなってしまう。「あの子にうちの子はいつもいじめられている。」あの子の組でなくして欲しい。「うちの組の子はそんなないじわるするわけがないのに」などと、集団生活のある時期にそのようなトラブルが起る。生命力が天地に溢れるとき、エネルギーのアンバランスのなせるわざだろうか。

五月病ってというのが新入社員、大学生などにもあるときいたのは、もう何年も前のことであるけれど。

自然の営みは驚くほど均斉がとれ、バランスがとれた、グローバルともいえるように思う。五月晴れの前後に、いかにも若芽をいたわるかのようにやさしい雨が降る日がある。そんなときの心がヴィヴァルディの組曲「四季」の春の部にうたわれているのではないだろうか。

剣のような葉形のしょうぶの花の、何というなやかな姿だろう。日に日に日射が強くなり、木蔭がうれしい日も五月にはある。そんな中へ子どもと一しよにたのしみ、一杯に遊びたい。

「惜しめど甲斐なし、すぎゆく春は。悔ゆれどすべなし、すぎゆくときは」といういささか古風な、センチメンタルな唱歌を小学校低学年のとき、教わり、うたっていたら、クラスの受持の若い先生が「その歌詞教えて」と言われたことがあった。大人にとっては惜春の情を感じもする五月である。子どもにとってはどうだろうか。「おばあちゃん先生も



むかしは子どもだったんでしょ？」と言われた。子どもの感性を養い、みがくことが今の幼児教育で大切だと言われているが、もと、子どもであるおばあちゃんには、それにはどうすればよいのか、どうもわからないことばかり。

でも、何はさておき、ミヒャエル・エンデが「モモ」の中でいっている「時間泥棒」にならないで、五月を子どもと楽しみたい。

「人間の第一の権利は子を養うことだ。」とのことばをフランスの医師でボランティア活動をしている人が言った。養うのと、育てるのは同じではない。憂いに人が寄り添うのを優しさという。憂うことと愛することはよく似ているようだ。どちらも相手を思いやるころである。

何もかもが新鮮で、輝くばかりの五月の子どもの周囲に、子どもの中に、もし小さな憂いの影がみつかったら、寄りそって、親犬のようになめてなめてその傷を癒してやりたいものである。暑い、はげしい夏の来ない前に。

(音羽幼稚園)